

発掘調査で分かる中世城館

千田嘉博*

はじめに

ご紹介を賜りました千田です。よろしくお願いします。昨日から報告会に参加させていただきまして、充実した時間をすごさせていただきました。わたくしが勤めております国立歴史民俗博物館は千葉県佐倉市にあります。国立と名乗っていますが法人化したしまして正式には、大学共同利用機関法人・人間文化研究機構・国立歴史民俗博物館という長い名称になっています。展示室を全部歩くと全長は3 kmにもなり、勉強できますし、体も鍛えられそうです。

博物館としての常設展示、企画展示を行うとともに、共同利用機関としてさまざまな学際的研究に取り組んでいます。展示と研究の両面から歴史学・考古学・民俗学・博物館科学などの分野における研究拠点として機能するよう努力しております。

本日は報告会と合わせて開催されている展覧会で、出土した実物資料を間近かに見せていただくことができました。それぞれ担当の方が懇切な説明を観覧者にされていて、実物資料の迫力とともに、考古学の成果をわかりやすく伝えていこうという真摯な取り組みに感銘を受けました。このまま感動を胸に帰れたらよかったのですが、お話をさせていただくことになっておりまして、逃げ出すこともかなわず、舞台の上に出てまいりました。

「発掘調査で分かる中世城館」というタイトルでお話しさせていただきます。中世の城館や、地元の本荘城のような近世城郭も、今日では発掘調査が行われ、その成果からいろいろなことが分かってきました。以前は中・近世の城跡の研究といえば文献史学や建築史学が中心でしたが、発掘調査から城跡を考えていく意義は一層高まってきています。今日は考古学からわかってきた城の実像を各地の発掘成果からお話させていただければと思います。よろしくお願いします。

I. なぜ中世の城跡を考古学から調べるのか？

中世という時代は、みなさんもお存知のようにたくさんの文字史料がございます。文書、記録、絵図などといった紙に書いたり描いたりした史料があります。だから、わざわざ発掘調査をしなくても分かっているんじゃないかと思われるかもしれません。そこでまず、どうして遺跡としての城跡を調べる必要があるのか、ということを考えてみたいと思います。

最初に紹介したいのが、佐賀県にあります肥前名護屋城跡と陣跡群です（スライド1）。この肥前名護屋城と陣跡は、豊臣秀吉が文禄・慶長の役（壬辰・丁酉倭乱）を起こして朝鮮半島に侵略した時の日本側の前線基地でした。名護屋城は多数の船を停泊させることができる湾を押さえ、城と港との間には大規模な城下の町も建設されました。城と町を取り巻く広い範囲に、日本各地から肥前名護屋に集まった大名たちの陣が築かれました。名護屋城跡と数多くの陣跡は、国の特別史跡に指定され、佐賀県立名護屋城博物館を中心に調査・研究、史跡の整備が進められています。

この名護屋城につきましては、たいへんよく知られた絵画史料である『肥前名護屋図（スライド2）』があります（佐賀県立名護屋城博物館蔵）。今は屏風仕立てになっていて、当時の名護屋城下町、あ

* 国立歴史民族博物館助教授（現：奈良大学文学部文化財学科助教授）

るいはその周囲に広がっております陣跡の様子をみごとに描き出しています。このすぐれた絵画史料によって、当時の城の様子は手に取るように知ることができるのです。

名護屋城の本丸を見えますと、本丸の端には立派な天守が建っています。そして本丸には大規模な御殿群が建っている様子などつぶさに知ることができます。ところで一般に天守のことを天守閣と呼びます。しかし天守を天守閣と呼ぶようになったのは明治以降のことです（たとえば通天閣などと同じ呼び方）、本来、天守が機能していた江戸期の史料に記されているのは「天守」で、「天守閣」ではありません。つまり「天守」は「天守閣」の略称ではなく、また「天守閣」は「天守」の正式名称でもないのです。「天守閣」は近代以降に広まった俗称なのです。だから学術用語としては天守を用いるのが正しいのです。

中世から織豊期にかけてたくさんの城がありましたが、多くの古文書に記されただけでなく、詳細な絵図史料まで残されているのは、たいへん希なことです。現地の名護屋城跡に行きましても建物はなにひとつ残っていませんし、石垣も崩れておりますので、遺跡へ行って調べなくてもこの絵で見れば全部分かるじゃないか、そういった印象をもちます。

しかし本当にそう考えてよいか、もう少し細かくこの絵を見ていきましょう。『肥前名護屋図』では、本丸北東の角に大きな天守があり、本丸北西の隅に、2階建ての隅櫓があったことが描かれています。現地を歩いてみますと建物は失われていますが、天守台や櫓台はしっかり残っていますから絵のように天守と隅櫓があったことを推測することができます。やはり『肥前名護屋図』は正確だなあ、と感心するわけです。

『肥前名護屋図』を注意深く見ますと、天守と隅櫓との間の石垣の上には塀が建っていて両者をつないでいたと描かれています（スライド3左）。ところが、今、現地を訪ねてみますと、天守と隅櫓との間は塀ではなく、多聞櫓（たもんやぐら）と呼ぶ平屋建ての長細い建物が建っていたことが礎石から確認できます。つまりこの点は絵画資料と実際の遺跡が大きく異なるのです。遺跡を調べることで、絵に描かれたのと違う肥前名護屋城の姿が見えてきたのです。

塀か多聞櫓か、というのは城としては重大な違いといえます。これは絵師が見誤ったせいでしょうか？しかし、ほかの部分の詳細な描写から考えると、単純に間違いと評価すべきだとは思えません。謎が深まります。

もう一度、現地の遺跡を丁寧に観察すると、本丸を囲んでいる石垣の内側（つまり本丸の平場のなかに）、現在の本丸よりわずかに小さく外側の石垣と平行に伸びた石列があることがわかりました（スライド3右）。その石列をねらって佐賀県立名護屋城博物館が発掘調査をしました。佐賀県立名護屋城博物館は、考古学、文献史学、遺跡整備といった分野の専門家が協力して名古屋城跡と陣跡の調査・研究・整備・活用に取り組んでいるすごい研究機関です。ぜひ機会をつくってお訪ね下さい。

さて、調査成果に話を戻しましょう。発掘すると、現在見えている最終段階の本丸石垣の内側に、ほぼ完全に埋められたもうひとつの本丸石垣が見つかったのです（スライド4）。埋められていた石垣も高さは数メートルはあって外側の見えていた本丸石垣と同じ高さですから、埋まっていた本丸石垣も工事途中で放棄されたのではなく、立派に完成したものであったことがわかりました。

さまざまな情報から考えてみますと、恐ろしいことです。豊臣秀吉は肥前名護屋城の本丸が石垣はもちろん天守や櫓、御殿も一旦完成した後に、わずかに敷地を広げる改修を命じたと判断できます。

これによって立派にできあがっていた本丸石垣を埋めて、外側に同じ高さの石垣を築かせ、新たにできた拡張部分に多聞櫓を建てたのです。天下人の力のすごさが伝わってきます。

この改修工事も大工事だったはずですが、なぜかこのことをはっきり記した文献史料はありません。そして精緻に描かれた『肥前名護屋図』も完成直後の肥前名護屋城の姿を描いたので、絵と実際の遺跡との間にズレが生じていたのです。つまり、こうした劇的な本丸の変化は、絵だけ見ていたのでは分からなかったといえます。そして、これほど史料に恵まれた肥前名護屋城であっても、実際の城跡を調べると文献史料や絵画資料とは違う面が見えてくるのです。細かなことまで分かる文献史料・絵画資料に恵まれていない多くの中世・織豊期の城について、遺跡から調べる意義がとりわけ大きいことを、このことはよく示すといえます。

だからといって文字史料から調べなくてよいということではありません。文字史料から分かったことと合わせ遺跡から分かってくることをどのように捉え・評価して考えていくのか、という学融合的な視点をもつと、今までとは違う一層深い歴史が見えてくるのです。中世・織豊期は多くの文献史料・絵画資料がありますが、遺跡から考えるのも同じだけ大切です。発掘からの研究は文献史料から考える歴史の補助学ではなく、文献史料から考える歴史とは視角の異なるもうひとつの歴史研究だからです。両者を対立的に考える必要はなく、先に申し上げたようにそれぞれのよいところを活かした「知の組み替え」＝学融合を推進していくことが必要だと思います。

今日は、「発掘から分かる」ということになっていますが、発掘からしか考えないということではなく、発掘成果を軸にさまざまな文献史料・絵画資料などと組み合わせること＝学融合的研究を意識して、お話しを進めさせていただきます。

Ⅱ. 城のつくり方を考える

1. 発掘から分かる城の地鎮

発掘で城が分かるということには、いろいろなものがあります。たとえば記録に「堀普請」と出てきても、どんな堀を掘ったのか、堀だけではなく堀と土塁を組み合わせで一緒につくったのかといった具体的なことは、記録だけでは分からないことがほとんどです。たとえば記録があっても具体的なことが文献から分かりにくいものに、地鎮があげられます。詳細は秘伝とされていたので記述がそけないことが多いのです。しかし遺跡から調べていくと、城は堀や土塁、櫓や門といった物質的な防御施設だけでなく、精神的にも守られていたことが見えてきます（スライド5）。

茨城県の鹿島城からは地鎮具が3種類も見つかりました（スライド6）。ひとつ目は素焼きの土師皿に墨で輪宝と梵字を記したものでした。輪宝は密教具ですが、もともとは武器でした。たいへんありがたいもので、自らぐるぐる回って、悪いものをやっつけました。輪宝と梵字を記した皿を埋めることで、城を築く土地を鎮めたのです。丸い土版に輪宝を型押しした土製品もここでは見つかります。本来、輪宝は青銅などの金属製ですが、地鎮用の土製品がつくられていたのです。

さらに、鶴と亀を描いためでたい吉祥像を墨書した土師皿も埋められていました。末永く城と城主の家が栄えてほしいという願いが伝わってきます。実際にはこうした皿に五穀などが添えられていたと思われます。先にご紹介した輪宝を埋納することによる地鎮は、江戸時代にもつづいていました。山梨県の甲府城からは青銅製の板を切り抜いて輪宝をつくり、中央に金箔を押したのものがつつかって

います（スライド7）。

土地を鎮めたのは輪宝や吉祥像だけではありませんでした。岐阜県神岡町にあります15世紀の館である江馬氏下館からは、呪文を記した土師皿が出土しました。呪文は2枚の皿をセットにして書かれていました。一枚は水の神様、金の神様、土の神様、火の神様、木の神様に館の安寧を託し（スライド8）、もう一枚はそれぞれの方位の神様に地鎮を願いました。各方位に神がおり、たとえば龍王を奉っていました（スライド9）。

地鎮がどのようにされていたのかを考えるのに、城跡から見つかる地鎮具から分析していくのは有効な方法です。しかし文献史料と合わせて考えると、より全体像が見えてきます。九州の島津氏に仕えた伊集院氏が整えた秘伝書は、特に興味深いものです（スライド10）。文献史料によると地鎮には戦の神様である軍神を勧請し、鍬入れのときには特別な所作や呪文があったことがわかります。季節によってよい方位、悪い方位もありました。複雑な儀式の中で、発掘で見つかった土師皿は埋納されていたのです。

しかし、すべてが分かっているわけではありません。高知県の西山城からは、ひじょうに薄い青銅製品に金箔を押した青銅製品が見つかりました（スライド11）。出土状況から城をつくった時に埋めた鎮め物だと思います。本丸の一番高い所に穴を掘って埋められ、皿と一緒に出土しています（五穀を盛ったのではないかと推測されます）。この鎮め物と思われる青銅製品は特異なかたちをしていて管見では類例がありません。陰陽道の流派によるさまざまな違いもあったのかもしれません。まだまだ分からないことも多いのです。

2. 将軍の館はなぜ隅がへこんでいたのか？

土地を鎮め、城と城主の安寧を願う行為の痕跡は、埋めてしまって見えなくなる地鎮だけではありませんでした。今度は絵画資料を見てみましょう。中世の京都を描いた『洛中洛外図屏風』のうち、国立歴史民俗博物館が所蔵する『歴博甲本洛中洛外図屏風』は将軍の館であった柳の御所（やなぎのごしょ）をみごとに描いています（スライド12）。そしてこの館をよく見ますと、館の隅に「鎮守」と貼り札があり、神様をお祭りした御社（おやしる）を置いていたことが分かります。実は四角い館にあった四つの隅で、この鎮守の御社がある方角は北東の隅にあたっていました。いわゆる鬼門の方角です。そこで鬼門を封じるために隅に鎮守の御社を置いたのです。この結果、館の北東隅は入り隅になって凹んでいたのです。鬼門から悪いものが館に入って、災いを起こすことを防いでいたのです。

将軍の館は京都のあちこちに移転しましたが、いずれも鬼門の方位は入り隅にしていたようです。館は高い塀をめぐらすだけではなく、神の力によっても守られていたことが分かります。一般に発掘調査をしますとすべてを合理的に説明しようと努めますが、もしこうした絵画資料がなかったら将軍館の隅のひとつがどうして入り隅になっていたのか、正しく解釈できるか難しいかもしれません。長野県の上田城は江戸時代の城ですが、本丸の北東の隅を入り隅にしていました。物理的な守りのくふうというより、これは鬼門よけと評価すべきでしょう。秋田県内の城館では、こうした事例はあるでしょうか？改めて見直してみると、たくさん見つかるかもしれませんね。

もちろん平地の館では北東が入り隅になっていないものもたくさんあります。そうした館は鬼門を

意識していなかった、と解釈してよいのでしょうか？入り隅になっていなくても、館の内側に御社を設置していた可能性があると思います。そうした視点で発掘成果をよく吟味することが求められるのだと思います。国立歴史民俗博物館が建つ千葉県の佐倉城では、城の鬼門である椎木曲輪の端に御社を置いていました。今では御社は移転していますが、御社の台座がしっかりと残されています。

3. 中世の人びとは気が見えた

ここまでは発掘や絵画資料から目で見えて分かることを中心に検討してきました。それぞれの力によって城は守られていたのです。そうしたなかで中世の人びとが、城をどう見ていたかを示す興味深い史料があります。やはり九州の伊集院氏に伝わったもので、特別な力をもった中世の人は城の運気を見ることができたことを記しています（スライド13）。

敵の城とどう立ち向かうか、攻めるのか、退くのか、敵は攻めてくるのか、籠城のままか、情勢を判断するのはとても重要なことです。その情勢を判断するのに、城から立ち上る運気を判断するのが大切だ、とこの史料は説いています。勢いよく運気が立ち上る城は、城兵が元気で敵の勢いがあるので攻めてはいけない。しかし、へなへなした運気が城から出ているときは、敵は弱っているので一気に攻めよ、ということになります。

すごく面白いのは、誰の目にも見える燃えるような運気が煙のごとく出ているときは、実は城が火事であり、強い運気とは違うので注意せよとわざわざ書いていることです。まじめなのか不まじめなのか中世の人も愛嬌があります。

現代の人間は、たとえば秋田県埋蔵文化財センターからは、どういう運気が出ているかと、まじめに語り合うことはないと思います。中世の人びとは、わたくしたちが失ってしまったいろいろな部分、もっと見える世界や信心を強くもっていたんだと思います。幸いというべきか残念というべきか、出土例では見つかりませんが、伊集院氏が伝えた史料には、秘伝中の秘伝として落城寸前の絶体絶命のときにだけ使うべき呪文も残されています（スライド14）。

それによりますと、もうこれはだめというときに起死回生の逆転をはかるためのまじないとして、敵の首を清め、さらに酒をかけ、その額に（戦国時代ですから敵の首を切って持ってきちゃうわけです）、卍（まんじ）を描き、そこに鳥・犬・敵などの不思議な呪文を描くとあります。それを時間とか方角とか決まったところに塚を築いて埋めると、攻めて来ていた圧倒的有利な敵はあら不思議、たちまち自滅するというのです。

首は残っていたとしても骨になっていますから、このような呪法の実態を考古学的に実証することは難しそうです。それにしても凄まじい秘伝・秘術の世界が城にはあったのです。

Ⅲ. 中世前期の城

1. 守りの施設の成立

つぎに考古学的な成果を軸に、城の変化を考え直してみたいと思います。まず中世前期から見ていきます。国立歴史民俗博物館には中世の武士の館の模型があります（スライド15）。鎌倉時代の武士の館をイメージしてつくったものです。ただ最近の研究ではちょっと堀が立派すぎるとか、あるいは土塁も高すぎるとか、中世前期の館というにはできすぎのところがあります。ただし、ある時期まで

の武士の館はこういう姿であるというイメージを最大公約数的にして集めたものとしては、学史的意味は高いと思います。一般にも中世の武士の館といいますと、土づくりで四角い館をイメージするのではないのでしょうか。

ところが南北朝時代の14世紀になりますと違うタイプの城が現れてまいります。『太平記』にも楠木正成の千早城とか赤坂城とか、幕府軍を相手にたいへん高い山の上に立て籠って戦った記事が出てきます。山城の登場です。鎌倉時代、それから室町時代にしても、幕府がきちっとしている時には、京都あるいは鎌倉に裁判所があり、武士も公家も問題が起きれば、裁判所へ訴え出ることで問題を解決できました。

ですから鎌倉武士は問題が起きれば、いきなり刀を抜いて斬りつけたり、戦って武力で解決したわけでは決してないのです。つまり鎌倉時代の武士の館の模型に立派な堀や土塁がありましたが、本拠を堀や土塁で守って自衛する必要は本来、政治や裁判制度がしっかりしていればなかったのです。何かあればそういった制度（裁判）を利用して訴え出て、裁判で決着をつけました。ところが中央権力が力を失うと、自力で問題を解決しなければならなくなります。それで14世紀の内乱時代であった南北朝時代や15世紀の後半以降の戦国時代には、本格的な山城が登場しました。

2. 切岸と堀－虚空蔵大台滝遺跡をめぐって－

高知県の木塚城を紹介します（スライド16）。この山城はまるでプリンを伏せたようなポコポコとした山からできていました。本当はより高い山の上にも山岳寺院を利用した城があったようですが、盆地を制圧できる丘の上に、木塚城がつくられていました。春野町教育委員会の発掘調査によりますと、城の曲輪（防御した平地）の周囲は人工的な急斜面に加工されていました（スライド17）。この守りのための急斜面を「切岸」と呼びます。秋田県の埋文センターで調査された虚空蔵大台滝遺跡（こくぞうおおだいたきいせき）でも、嚴重な切岸をめぐらしたことのご報告がありました（スライド18）。

切岸をつくることによって、曲輪への侵入を防いだわけです。登れないくらい急な斜面にしたところに意義がありました。先ほどまで精神的な城の守り方を見てきましたが、切岸は物理的に侵入を阻止する守りの施設です。そして14世紀には切岸という急な壁によって城を守った山城が築かれたことが分かってきます。

この後、15世紀の室町時代から16世紀の戦国時代になると、切岸とセットでその裾に堀がめぐるようになりました。空堀と切岸という組み合わせで、城をより強く守るようになったのです。しばらく前までは、そういうふうに説明されてきました。ところがご報告があった虚空蔵大台滝遺跡では、11世紀後半～12世紀にたいへん立派な切岸と、その裾をめぐる空堀がつくられたことが判明しました（スライド19・20）。このことは従来の城郭史の常識を塗り替える成果といえます。遺物をまったく知らなければ、15・16世紀の城と誤解したかもしれません。

日本列島の北の地域では、中世の城としてはひじょうに早い段階である12世紀に、切岸と堀とを組み合わせた防御施設がすでに成立していたのです。これまでの城の歴史は関東や畿内の城をもとに考えられてきました。しかし今回のご成果は、城の歴史を考える上で、秋田県をはじめとする北の地域の先進性を明確に示すものです。

先ほどのご報告の際に会場からご質問もありましたが、奥州藤原氏との関係、前九年の役・後三年の役との関連の中で、この地域にいち早く、室町時代の防御施設を先取りしたような、城郭プランが出てきたと評価すべきです。すると北の地域だけでなく西の地域との関わりも視野に入れて検討をする必要があります。ただし同時期の日本列島の西の城は、切岸と堀とをセットにすることを実現していません。14世紀になっても切岸主体です。そういった意味では、西の城と東の城はかなり違っていたのです。

3. 北の城と沿海州の城

では海を渡って、さらに北のロシアの沿海州（ウラジオストック周辺）ではどんな城が築かれていたのかという課題が出てきます。日本列島の北の城の成立に大陸からの影響はあったのでしょうか？ウラジオストック市のそばにあるニコラエフカ土城は、12世紀～13世紀に使われました（スライド21）。平地の城郭都市で、周囲には巨大な城壁をめぐるします。ほとんど完全な状態で残っております（スライド22・23）。

同時期の山城もあります。やはりウラジオストックのそばにあるシャイガ山城は、稜線に築いた城壁で谷筋を囲い込んだいわゆる朝鮮式山城の形態をとりました（スライド24・25）。城内には鍛冶工房をはじめとしたさまざまな工房群、段々に削った削平地に建ち並ぶ住居群、政庁跡や倉庫群などがあったことが発掘によって判明してきています。山の尾根筋に築いた土塁線に開いた出入口には、鍵の手状に土塁を曲げた外柵形を備えて守りの工夫をしていました。また塁線上には馬面と呼ぶ、側射もできる櫓の張り出し（カタパルトの台座）が点々と設けられていました。

こうした城郭の構成要素を比較していくと、沿海州の城と日本列島の北の城とは異なっており、単純に伝播や影響では説明できません。そうすると虚空蔵大台滝遺跡のような12世紀の城はどのように成立したのか、東アジア全体の中で考えるべき大きな問題だといえます。報告書がまとめられることを楽しみに待ちたいと思います。やはりここでも資・史料を比較したり境界を越えて学融合的に考える視点が重要になります。

IV. 中世後期の城

1. 戦国期拠点城郭への転換

つづいて室町時代、戦国時代のお城について見てまいりたいと思います（スライド26）。室町時代の城は、先ほど『洛中洛外絵図屏風』をご覧いただきましたけれども、ああいった將軍の館を基本にいたしまして各地の守護大名が、それぞれの館—いわゆる守護所と呼ばれる館—をつくりました。応仁・文明の乱の後、それぞれ各地の大名は、自分の力で地域を治めていくということの必要に迫られました。

その結果、平地の館を拠点にすることをやめて、戦国期の拠点城郭と呼ぶ新しい山城が出現してきました。どんな城かと申しますと、政治機能、居住機能、文化的機能、宗教的機能、そして城下の経済中心的機能、そして防御機能といった、館と砦に分離していた諸機能を統合したのが戦国期拠点城郭です。地方によって戦国期の拠点城郭が出てまいります時期は、微妙な違いはありますが、大きな転換としては1530年代、元号では天文年間が転換点になったと考えております。

現在、米沢市所蔵の『上杉本洛中洛外図屏風』には細川管領邸が描かれています（スライド27）。管領は将軍にお仕えし最も高位な武士でした。正面に2つの門―正式な門と通用門―がありました。正式な門の内側には大きな広場があり、広場に面しては主殿という正式な儀式を行う建物がありました。また館の中には大きな庭がありまして、庭に張り出した会所と呼ぶ人間的な関係を深める儀礼や宴会・文芸活動をするという空間がありました。その奥には日常の住まいなどが建ち並んでいました。こうした館の構成はまさに将軍の館をお手本にしたものでした。

あまり残っていませんが、主殿といった建物も現存しているものがあります。たとえば滋賀県の園城寺光淨院の客殿（国宝）は、『上杉本洛中洛外図屏風』に描かれた細川管領邸の主殿とそっくりです（スライド28）。館のプランの規範性の強さが分かります。

2. 観音寺城

戦国時代の第2期、16世紀第2四半期になって、館を中心とした武士の拠点から山城に変わっていくようすを、今度は山城側から見ていきたいと思います。その事例として滋賀県の観音寺城を紹介します（スライド29）。城主の六角氏は、鎌倉時代以来の由緒深い武士で、もともとは小脇館（おわきやかた）という平地の館を拠点にしていました。まだ内部の発掘調査が進んでおりませんが、先ほどご覧いただいたような、主殿・会所をもつ将軍の館を模した館であったと推測されます。

六角氏は戦国時代になりまして平地の館を捨て、比高差300mもの高い山の上に本拠を移動しました（スライド30）。観音寺城はおびたしい曲輪から構成されていました（スライド31）。六角氏の日常の館は山の主要な尾根筋にありました。六角氏をあるとき連歌師が訪ねてきました。そのとき六角氏の当主は伏せておりまして、家臣とは会わないといていたのですが、親しい連歌師が参りましたので会おうということで、いろいろ楽しく宴を開いた記録が残っています。

そのとき館から遠くの大和の国ですとか伊賀の国とかまで見えたと書いています。館が山の上にあったことがはっきり分かるのです。従来の常識では山城は合戦のときに立て籠る、日ごろは麓の館に住んでいて、いざというときだけ山城へ逃げ込む、と考えられてきました。しかし病気になって寝込むのも山の上ということは、大名自身の生活の主体が山城にあったことが確実です。

観音寺城内の尾根筋にある池田丸では発掘の成果を藤村 泉氏が分析されて、建物プランが詳細に復原されました（スライド32・33）。会所と渡り廊下でつないだ常御殿があり、常御殿には台所、居間、寝所、広間、茶室、花壇もありました。曲輪の奥には蔵もありました。たいへん整った御殿でした。これは到底、臨時に逃げ込むという暫的な施設ではありません。実際、出土した遺物でも、播鉢、壺・甕、灯明皿、硯、水滴などが見つかっていて、この点からも山の上でくらしことが判明するのです（スライド34）。

3. 村の城

大名の城の動きを見てまいりました。しかし戦国時代には、地域に密着した村の殿様、あるいは国人領主という武士たちの動きを捉えることも重要です（スライド35）。大名というのは、江戸時代の大名に最後はつながっていきますように、大名を頂点にいたしました縦の権力編成を組んでいこうとしていきました。ところが中世というのはたいへん面白い時代でありまして、それに対抗して横のつ

ながりでみんなが連合して地域を治めていくという、そういう動きが非常に活発に行われておりました。戦国時代はそうした大名の縦の編成と中世の横のつながりといったものが激しくぶつかり合うという時代になってまいります。

地域からの動きによってもたくさんの城館が築かれました。たとえば三重県の風呂谷館は、まわりに堀をめぐるし土塁を備えた四角い平地の館でした（スライド36）。内部に建っていた建物は、農家の立派なもののようなつくりでした。先ほど大名たちの將軍の館を模した主殿や会所を備えた上級武士の住まいを見てきましたが、地域の中から現れた村の殿様・国人領主の館には主殿や会所といった典型的なプランに則った建物はまったくありませんでした。先に述べましたように江戸時代の農家の建築に近い建物プランでした。

そういった、まったく上級武士の館のあり方とは全然違う、別のタイプの館が下克上の流れに沿って広く造られていったのです。そうした村の殿様・国人領主の館も、実はいろいろなタイプがありました。三重県の本原氏城は、5つの館がちょうど丘の隅にきれいに横に並ぶという城でした（スライド37）。ひとつひとつの館は、お互いの間の堀ですとか土塁を共有し合って、仲良く並んでいました。一人の強い殿様が村を治めていたというタイプだけでなく、村の中の有力な人びとが擬似的な血族関係をつくったり、あるいは実際に婚姻形態を結んだりして本当の同族関係になり、有力者連合という形で村を治め、さらには村と村、地域の領主層が連合して横に連結した政治構造を構成したのです。

それを中世の用語でいいますと、一揆（いっき）となります。そうした領主連合が盛んに行われると、誰かが飛び抜けた存在になるのは難しく、横並びの政治構造に対応した横並びの館が広く分布しました。城の形態は、まさに政治の形態に対応したのです。

4. 岩倉館に見る守りのくふう

室町・戦国時代の城館の話をしてきました。さて今回の報告会で岩倉館跡のご成果をお伺いすることができました。発掘によりますと15世紀頃の室町時代の館跡で、たくさんの曲輪を組み合わせた山城でした（スライド38）。残念ながら土取りで城跡の一部はすでに失われていました。先に虚空蔵大台滝遺跡では切岸の下に堀がめぐるといって、進んだ防御方法をとっていたのですが、岩倉館では切岸で館を守ったところが大部分でした。このことだけを取り出すと、発展の順番が逆転してしまっています。

もちろん進んだ部分もありました。岩倉館の中心部分から伸びた尾根筋を、ずたずたになるほど堀切りを入れて断ち切っていたのです（スライド39）。岩倉館の殿様は、よほど尾根筋から敵が攻めてくることを心配していたようです。こんなに堀を築いたのは、心配で夜も寝られなかったのかもしれませんが。こうした弱点を克服した尾根筋の堀切りは興味深いものです。

もう一つ面白いのは、堀切りで切りまくった尾根筋の堀切りのひとつに尾根を完全に切断せずに、堀り残した所があることです（スライド40）。ふつう土橋といいます。しかし尾根筋は切って切って切りまくっていましたが、土橋としても向こう側にはとても行けないですね。ですから、何らかの改修の結果を示しているのか、堀底を伝って尾根の右から左へ通り抜けることを防ごうとしたものかもしれません。いずれにしても、一つひとつの要素を見ていきますと、細やかな配慮をしてつくったことが偲べれます。

V. 発掘の成果を活かす

秋田県埋蔵文化財センターは毎年報告会を開催され、また発掘の主要な遺物を実際に見ることができ展示会をしておられます。こういった取り組みは、発掘調査の重要性の理解を深め、発掘成果を共有して成果を地域に活かしていくために、重要で意義ある活動です。最後に、そうした成果をいかに活かしていくのか、という点から、ベルギーのエーナム遺跡博物館を紹介させていただきます。

エーナムはベルギーのアントワープ市の南にあります。中世以来の城や修道院とそれを核にした町の遺跡です。その遺跡を中心に遺跡整備や遺跡博物館の整備が進んでいます。エーナム遺跡博物館の展示室は、日本の歴史博物館の展示室にはない、波うった形の展示ケースです（スライド41左）。展示されている遺物の量はとても少なく、みんなきれいなアクリルのケースに入れられています。ライティングも下から上から間接照明みたいな形で当てたりとか、なんかブティックに来たような、そういうきれいな展示であります。

日本の歴史博物館に親しんでいる者としては、もっと展示してよ、なんかこれじゃ物足りないよ、どうしてこんなちょびっとしか展示してくれないのかなあと思うのですが、それには深いわけがありました。その展示ケースの反対側には巨大なモニターと連動したタッチパネル画面があります。それを触ることで大画面と連動したコンピュータグラフィックスを自在に操れるのです（スライド41右）。

ふつうコンピュータグラフィックスは、遺跡のもっとも整備された時期を描きますが、面白いのは、任意の場所で、タッチパネルを指で上から下へ、下から上へなぞっていきまると、コンピュータグラフィックスが指と連動して、描かれた景観がどんどん古くなったり、新しくなったりするのです。時代の変遷をもコンピュータグラフィックスとして描いています。具体的には1500年、1250年、1150年、1040年と同じ場所の移り変わりが映像として示されます。エーナムという場所を長い間発掘調査しておりますので、変遷をたどることができるようになっているのです。

この画面は多機能でありまして、チョンチョンとクリックしますと、好きな所で画像をアップで見ることができます。アップにしますと、さらに情報画面に飛ぶことができるようになっていて、画面が切り替わって、遺物の写真やデータを見ることができます。年代、機能を定めるために、決定的な役割を果たした遺物の情報が呼び出せます。そして、その遺物の実物をモニターと対になっている展示ケースで見られるというわけです（スライド42）。

背後に並んでいる展示ケースというのは、このコンピュータグラフィックスと連動する形で有機的に結び合って、こういったことから歴史像が見えて来たんだということを示すという、そんなつながりで展示しています。よく作り込んだ展示です。

次の展示室に参りますとたいへんガラッと雰囲気が変わりまして、「エーナム千年の宴」という展示になります（スライド43）。30人ほどの原寸大の表情や衣装まで精密に再現された古代から現代までのエーナムにくらした1000年間の人びとが宴会をしています。人形の前に円盤状のテーブルがありまして、その中央に遺物が並べられています。その周りには緑色に光るスイッチが並んでいます。このスイッチはテーブルの中央の遺物に対応しているのです。

奥の人形は、実は発掘で見つかった遺物をもとに再現された人間なのです（スライド44）。たとえば卵の殻が出土していますが（スライド45）、卵のかけらのスイッチを押しますと人形の中のひとり

の女性にスポットライトがあたります（スライド46）。そして背後の大画面に、その女性が映像で登場いたします。発掘調査の時、卵のかけらが中世の層から出てまいりました。ふつう、そうしますと、ああ中世の人びとも卵を食べたんだなというぐらいのことで、終わってしまいます。

ところが、この博物館では中世の時代に修道院に卵が運ばれてきて料理に出されているってことは、その卵を朝集めてきて、修道院に隷属的に仕えているそういった人々がいたに違いない。いたから、そういった遺跡に殻が放り込まれているんだろうと、だからそういう人を復原しようということで、ここでは1253年頃の隷属的立場の18歳の女性を復原したのです。

こういうふうにエーナム博物館では発掘の成果というものを、どこまでわかりやすく歴史を再現して伝えられるかを、極めようとしています。ちょっとやりすぎているかもしれませんが、市民にとってどんな歴史展示がわかりやすいのか、共感してもらえるのか、踏み込んでいます。ただ発掘で見つかった遺物を並べることで、歴史を考えて下さいという展示がもっとも優れてるのか、それだけではなく直接、人間をモノ資料から再現し、その人に直接語ってもらうことで示される歴史のわかりやすさは魅力的に思えます。日本では、まだここまで踏み込んだ博物館はありませんが、考古学の資料をどう活かしていくのか、ということも、もっともっと知恵を絞る必要があるでしょう。

遺跡を解明する楽しさ、土器を読み解くよろこびが尽きることはありませんが、モノとしての観察に留まらず、モノからそれぞれの時代の人間の喜びや苦しみをも見通していくことに、人びとが共感できる歴史があるのではないかと思います。そうした意識をもって中世の城跡を研究していきたいと願っています。最後までご静聴下さいまして、ありがとうございました。

（追記）

本稿はテープ起こしをしていただいた講演記録をもとに、大幅に補筆したものである。

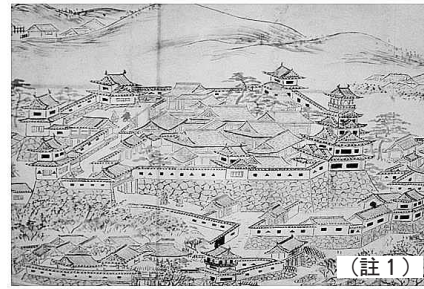
なお講演時に千田は国立歴史民俗博物館・研究部に属していたが、2005年4月から奈良大学 文学部 文化財学科に異動している。

I. どうして城跡を調べるのか？ — 肥前名護屋城跡から —



1

スライド 1



名護屋城中心部 (肥前名護屋図)

2

スライド 2



『肥前名護屋図』と遺構の異同



3

スライド 3



発掘調査で検出された石垣 (名護屋城)

スライド 4

II. 城館と地鎮

- 中世の城館は堀や土塁で守ただけでなく、さまざまなまじないや陰陽道の儀式で守られていたことが発掘によってわかってきた。



5

スライド 5

吉祥・輪宝 による地鎮

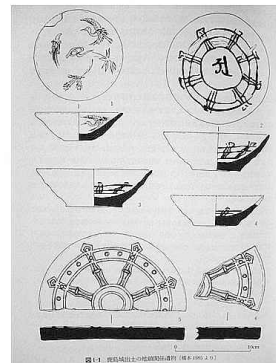
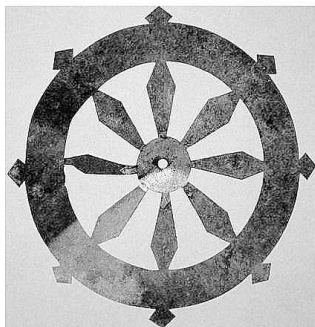


図 4-3 肥前名護屋城跡の地鎮図 (肥前名護屋城跡)

6

スライド 6



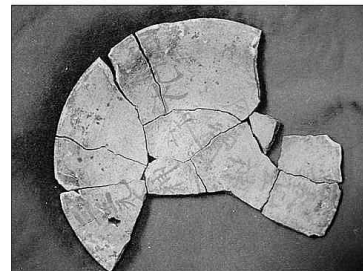
山梨県 甲府城出土 輪宝

7

スライド 7

呪文による地鎮

- 一徳元水神
- □□元金神
- 五儀元土神
- □□元火神
- 三主元木神

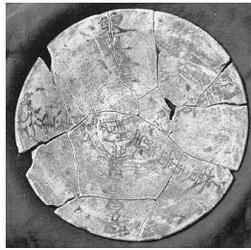


呪文を書いた土師皿をあわせ口にして四方に埋納する(15世紀 江馬氏下館) (註3)

(註3)

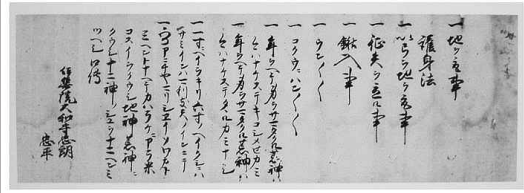
スライド 8

- ・中央黄帝黄龍王
- ・西方白帝白龍王
- ・北方黒帝黒龍王
- ・東方青帝青龍王
- ・南方朱帝朱龍王



(註 4)

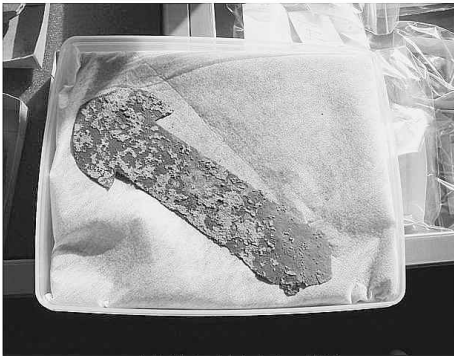
スライド 9



中世の築城に際しての地鎮・軍神勧請

(註 5)

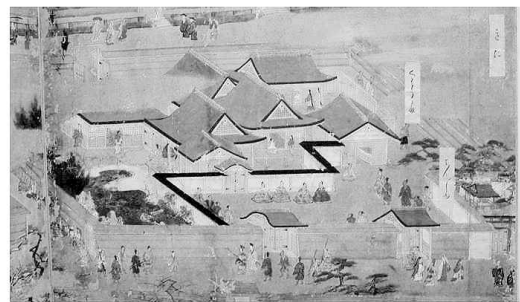
スライド 10



高知県 西山城 本丸の鎮物

11

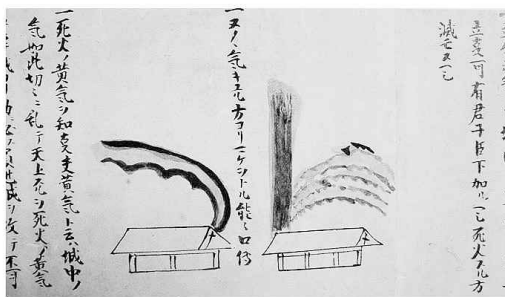
スライド 11



16世紀前半の足利將軍邸「柳の御所」
(歴博甲本洛中洛外図屏風)

(註 6)

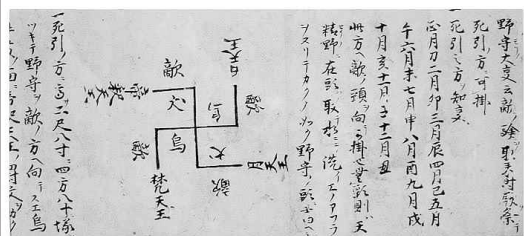
スライド 12



中世の運気の読み方「運氣論」

(註 7)

スライド 13



中世の戦勝の呪法

(註 8)

スライド 14

Ⅲ.中世前期の城館



中世の武士の館 (模型)

(註 9)

スライド 15

南北朝期の山城—高知県木塚城—



16

スライド 16



高知県木塚城の調査の様子

17

スライド17



秋田県 虚空蔵大台滝遺跡 全景

18

スライド18



秋田県 虚空蔵大台滝遺跡の切岸と空堀

19

スライド19

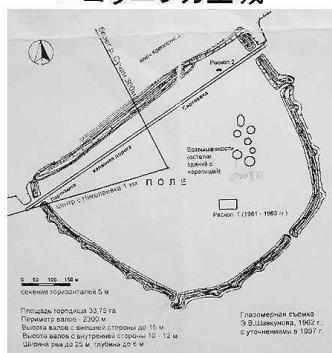


秋田県 虚空蔵大台滝遺跡の空堀

20

スライド20

ニコラエフカ土城



21

スライド21



ニコラエフカ土城

22

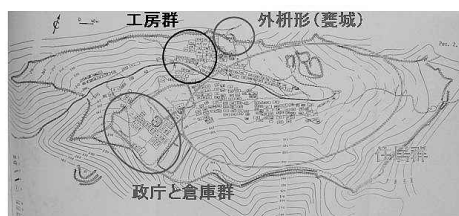
スライド22



ニコラエフカ土城

23

スライド23



シャイガ山城

24

スライド24



シャイガ山城

25

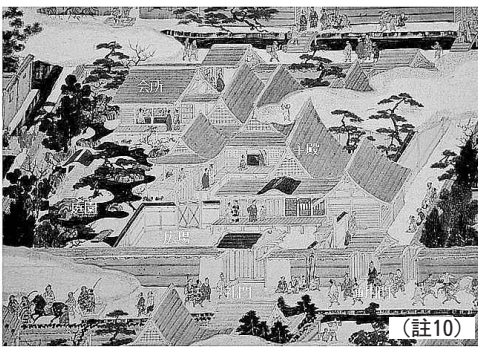
スライド25

IV.守護・戦国大名の拠点

- 将軍の館を手本とした守護大名段階の平地居館(守護所)から戦国期拠点城郭への変化
- 戦国期拠点城郭は、政治・居住・文化・宗教・経済・防御の諸機能を統合した拠点
- 守護所から戦国期拠点城郭への転換は、1530年前後(天文年間)。

26

スライド26



「上杉本洛中洛外図屏風」による細川管領邸

27

スライド27



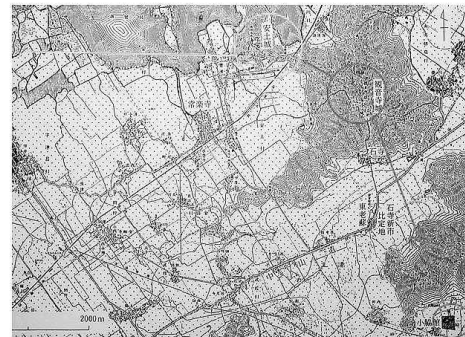
滋賀県 園城寺光浄院客殿

スライド28

戦国期拠点城郭の構造—滋賀県 観音寺城—



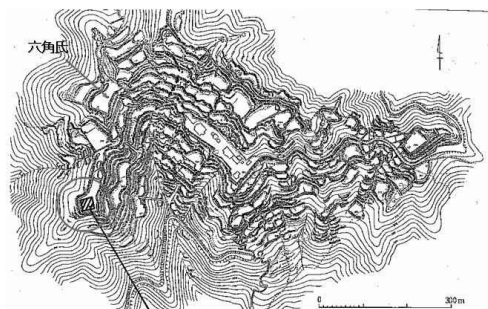
スライド29



滋賀県観音寺城の位置

30

スライド30



滋賀県 観音寺城

31

スライド31



滋賀県 観音寺城中心部

32

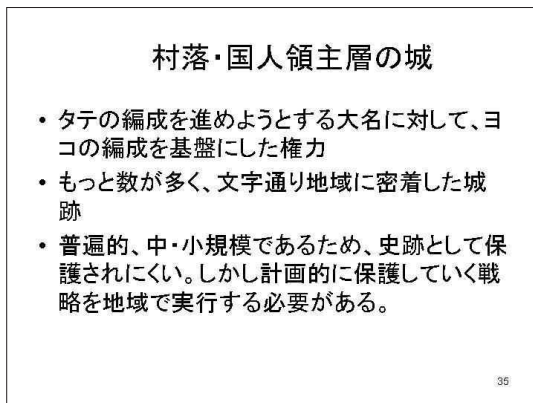
スライド32



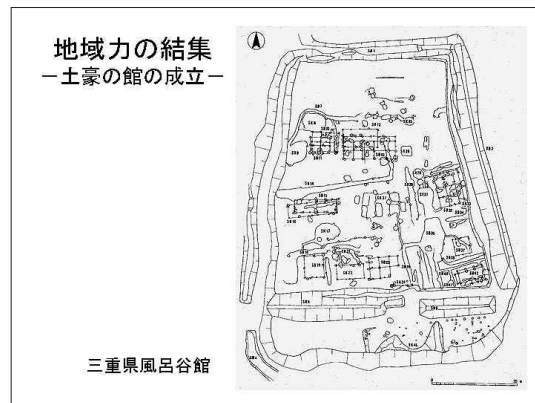
スライド33



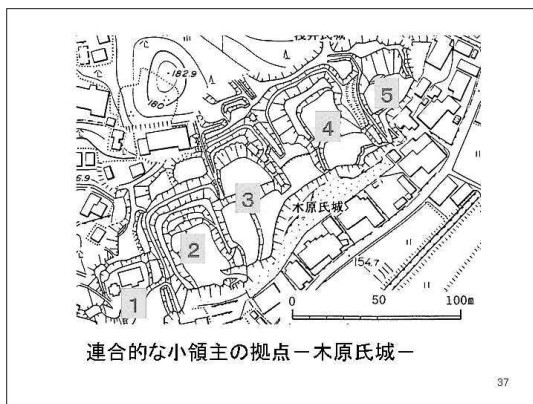
スライド34



スライド35



スライド36



スライド37



スライド38



スライド39



スライド40

V.発掘成果を地域に



ベルギー エーナム博物館

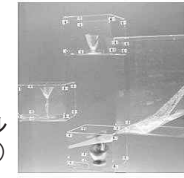


67

スライド41



展示物と連動した映像パネル
(ベルギー エーナム博物館)



69

スライド42



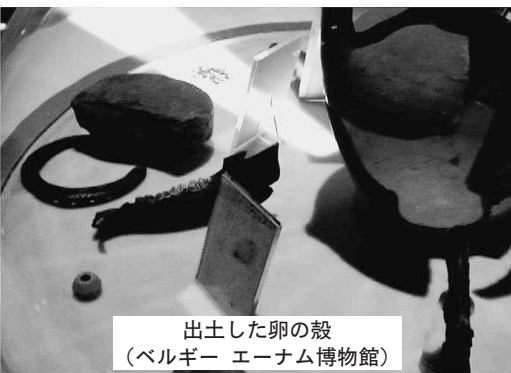
出土遺物と千年の宴
(ベルギー エーナム博物館)

スライド43



様々な時代の人々
(ベルギー エーナム博物館)

スライド44



出土した卵の殻
(ベルギー エーナム博物館)

スライド45



卵の殻から復元された当時の女性
(ベルギー エーナム博物館)

73

スライド46

註1 所蔵：佐賀県立名護屋城博物館

註2 高瀬哲朗 『名護屋城の築城と改造について』 「佐賀県立名護屋城博物館研究紀要第1集」 1995（平成7）年 佐賀県立名護屋城博物館

註3 所蔵：岐阜県 飛騨市教育委員会

註4 同上

註5 所蔵：東京大学史料編纂所

註6 所蔵：国立歴史民俗博物館

註7 註5に同じ

註8 同上

註9 註6に同じ

註10 所蔵：山形県 米沢市上杉博物館

註11 資料提供：滋賀県 長等山園城寺

註12 所蔵：滋賀県立安土城考古博物館